

「然れば御不審は御尤も亦た御無禮至極とも相心得てはおざれど、御場所柄をも辨へず、斯く仕らねばならぬ、其仔細御聴とりの程、願上まする、僕れこと嘗てよしなき事致し、何とも彼とも得も云れぬ怪しき、變化を呑み込んでござる、それ以來兎角に氣分勝れず、兎もすれば、胸と言はず腹の嫌ひなく、搔き撚らるゝ如な、最とく悪しき氣持と相成りツイ夫がために識らず知らず迂濶くと、之を嘔き出す意志で、彼の如き不思議な聲を出します次第におざれば、何卒御諒察あつて、あはれ不愼と思召されたし

と涙さへ交へて、眞面目の物語り、これが新左衛門でなかつたなら、無

論狂人扱ひで此席は有無な言せず退かされて終ふ處だ、併し當人が會利である、殿下は笑ひながら、相對になつて續てお言葉を下され

『ウム面白さふな物語りではある、而て又新左、如何なる變化を喰つたか、何も一興、速くく咄せ、又療治を致さにやなるまい

『ハ、ハツ、有難がり奉る、實は斯様でおざります、僕れ嘗て殿下より御暇を給はり、一日北山に遊びくらし、思はず時を移し、はや家路に歸らばやと存せし折は、誰そや彼れやの、逢魔が刻と相成り、這はシナシタリと歸路を急ぐ折柄に、耳を襞裂く如き音聲にて

『俟てツ……

と呼留むる者これあれば、僕れ潑と愕き、思はず願りかへれば、仰ぎ見
るばかりかの、最と怖しき變化現れ、大口開て呵々と打笑ひ居りますので
僕れ思はず慄と致し、頭より水にても浴びたる心持は致せしも、开處が
新左の新左たる剛膽不敵の魂を、臍下に落ちつけ、變化の正體、如何に
と能くく、眸を据へて凝視むれば、天狗の如く又鬼の如く、異體の分ら
ず、身體の丈高さこと、高いはく其丈け一丈にも餘る可く、其容貌人
間の如く、其面の色、紅を以て彩ると異ならず、鼻の長さことは、素敵
滅法界にも達す可く、形狀象の鼻に鬚髭たり、又左右の兩腋には大なる
羽翼がおざります、僕れ從來、繪艸紙等にて見たる天狗とは少々相違し

て居りまするが、マア天狗と言つても、大した誤りもない變化でおざる
と面白可笑しく、亦た物凄く身振手真似なぞして話をはじめた、殿下も
徒然の折柄、大に御意に適ひしか、乘氣になりて
『夫から、其變化は如何致せしぞ
『ハッ、應て其變化天狗は鏡の如き、炯々爛々たる兩眼をカット見開き
焔火でも噴出しさうな、眞赤な大口、バツクと開けば劔の如な鋭き牙を
噛み鳴らしながら、私を引つ摑んで、頭からムシャリくと、今にも啖
はずらんと致しますので、道がの僕も、これには大に愕きましたので、
斯様なん氣の人間も、啖はれて終へば、命が失なると思へば、何とな

く恐ろしく、又心細く顔の色も眞蒼になつて、實はガタ／＼と戦慄ひ縮み上り、逃げやうと致し、身をもがき甚麼に焦れども、ピリツとも身動さへ致させませぬ、何が偕て、最早斯うなつては、彼の天狗に啖はれて終ふより他はないので、絶體絶命、進退維れ谷まると云ふ場合、斯くなれば奇妙なもので、智惠の深い斯く云ふ、新左でおざれば、ムラ／＼と孔明楠氏も恐らくは、及ぶまじきと云ふ、謀計が胸に浮びましたと天狗の物語りは、愈々佳境に進んだ

「進左、大分に話が味が入つて面白の、シテ又其謀計とは、如何な事ぢや、疾く咄せ

「其計畧と申すは、斯様で、兎ても僕れが如何ほど遁れんと致しても、力業では到底も及ばない事にておざれば、何でも彼でも、欺すに如くなしと存じ、故意と言葉を和げ、心を鎮靜て彼の天狗に對ひ、天狗様／＼と呼掛けますと、天狗は何だ／＼と申す、开處で、僕れさも／＼眞誠しやかに豫ねて世の人々申するには、天狗様、貴下には、空中を自由自在に飛行の出来る、妙術がおざります爾で、誠くおざりまするかな、と糺ねますると、天狗はさも得意らしく、自慢の高き鼻が猶々高く致し、有るとも／＼、如何なる處も千里一飛ぢや、斯様に申す言葉の尾につき、僕れの心中ハヤ計略の圖にはまつて來たと、喜ぶ心を色に作さず、

却て悄然と致した風情を示し、アハレ天狗様よ僕れ死際の臨終の願に、其珍らしき飛行の術を、少々にても宜敷くおざれば、拜見仕りたいと存じます、若し幸ひに僕れの一代一生の願、御聽容あつて其飛行術を一見の光榮を得たならば、骨を碎かれ、肉を裂れて、如何なる悲惨な、最後を遂げますると、もさらしく憾みとも存せず、快よく死地に就き、天狗様の御餌食と相成、お美味くはなくも、お腹の肥しになります、と頼みました處、天狗も何分か、僕れの臨終の頼みを不愠に思つたらしく、可しく、汝は存外捌けて面白い奴ぢや、然らば汝の望みを叶へ得させ心ゆくまで我が飛行の術の妙技を見物させて遣はす………と承知をして

何やら口に呪文を唱へると、見る／＼兩腋の黄いろい羽翼は、動くよと見るまに、空中遙かに飛去り、飛來り、千里萬里を瞬間に、往來致しまして、臆て舊の位置に戻り、何うぢや人間、定めて面白かつたであらふ是で汝の死に際の望みを叶へて遣はしたと申るもの、イデ、約束の如く汝の頭から、ムシヤリ／＼と啖はんすと、ハヤ大口開いて今にも飛懸り啖ひつきさうなので、僕れ周章て之を遮り止め、イヤ今暫くお待ち下されたし、甚だ慾深き御願の如くなれど、今一ヶ條の願こそあれ、开は世に佛作つて魂を入ずとか申、諺がおざるが、既に天狗様は僕の望に從ひ、大なる御形状や、飛行の術も、見物さして頂き、此上の喜び又有難

き事はおざりませねど、傳へ聞きますには、天狗様は大きくも、小さくも屈伸自在に御形状を變化する事が出来るやに承る、誠く然でおざるか、と、糺ねを致しますれば、天狗は笑つて、爾うともく如何な小さくも成れると答へた、其尾について夫ぢや此上のお願ひに、僕の掌の上に乗れる、程小さくなつて、僕に見せて頂きたい、たい大きい計りを見せて小さい處を見せないとありては、所謂佛作りて魂入れずと申すは此事、何とお序に此儀も枉げて御承引願たい、と申ますと、天狗は僕に計畧ありとは露知らず之をも快よく承諾して、一遍帳斗を切つたと思ふ中小さいはく、豆粒程の姿と化け、僕の掌の上に、整然と乗りました、

僕れ實は一時恐れ戦きこそ致せ、元來が剛膽な男でおざれば、乍ち度胸が据り、暫時掌の上にて、天狗を見詰めて居りましたが、俄にグツト勇氣が身體に充て参ましたのは、成程以前の姿で、一丈もあられたひには五尺の小男如何とも手のつけ様おざらねど、今は蟻か豆の如きチマ／＼しき姿、何のそのと、大膽にも亂暴にも何ぞこれしきと、ガプリー一口に其天狗殿を呑み嚙下して、危き難を免れて其場を立去りました次第でおざります

と然も眞誠しやかに眞面目腐つての、天狗の長物語り殿下は心竊かに、新左の意中を悟りしもの、如く

「ウムー。其天狗を呑んだ爲めに、左様に奇妙なる聲を出すのであるか
「ハ、ツ、尊命の如くで、併し殿下、考へ見れば、不思議な譯で、噫、
怖る可きは、油断でおざる、天狗元とこれ神獸。大小屈伸自在にして、
其力山をも抜き、到底も僕れの如き、非力の者にいかで呑まれる如な筈
はおぎなけれど、一度び油断の爲め、其威を失ひ小さくなりたれば、僕
れの腹の中へも押込まれて終ふので、實に憐れと言ふも愚な次第、若し
彼の天狗油断なく、大なる形状のまゝにてありしならば、何人と雖、手
をつくる者も候はず、ナント殿下、油断は恐る可きものでおざります
と猶も天狗談に添へて、新左衛門は暗に、此度び太閤殿下微行の思ひた

ちは、甚断だ油を極めし愚の企である、太閤威力絶大と雖、伏見の城に
あり、周圍に勇將猛卒雲の如くに、護り居ればこそなれ、僅に三四の從
者を伴ひ微行して城外にあらば、容易く刃向ふ事が出来るこれ、恰も彼
の天狗が丈餘の姿を現し居る時は、其威力に怖れ誰も手を下す者もない
が、小さき姿となればこそ、曾呂利如き者にも一呑みにせらるのである
之れ油断の罪なりと、夫れと明白に言ずして、諷諫に及んだ
太閤殿下は、熟く聞終り、曾呂利の才辨にほとく感心せられた
「可し、相了解た予も微行を先日より、思ひ立ち居れど、其方の如き奴
に、呑まれぬとも限らぬ、沙汰止みぢや」

「ハ、ハツ、有難がり奉り、臣等一同此上の喜びはおざりませぬ
と其席に居り合せた、二三の重役股肱の家臣は、頭を低げた

十九 殿下の仲裁二寵臣の和解

曾呂利新左衛門の氣轉は、能く殿下の氣心を呑み込み、其向から愁じな
意見や諫言だてらを爲れば、近來甚く旋毛の曲つた、太閤の事ゆへ、猶
更ら横にひん曲げるは、知れ切つた事と面白可笑しい、滑稽交りの天狗
怪談を擔ぎ出し、首尾よく微行を思ひ止らせたので、重臣方より厚く其
功を擣らはれ、大に面目を施し、殿下よりも一層の御寵愛を辱ふし

た
或る冬の日のあつた、相變らず新左衛門は殿下の御傍にお伽を勤めて居
ると、殿下が茶道の師と仰ぐ、千の利休から、殿下に珍味の御馳走を奉
るに因り、御來臨を願ひ出でた
『ノウ新左、利久宗匠より、予を招待し來つた、予は拍こに應じ遣はさ
ふと存ずる、就ては其許も伴致せ
『畏まり奉れど、彼の利久坊主、何の風情ある御待遇に能う出來ざるは
必定お止め遊ばしたら如何で、夫に本日は、寒氣も強くチラ／＼雪さへ
降出しておざれば、お見合せ然るべきやと存じます

「コラ／＼新左、兎角其方は利久を嫌ひ憎む様子ぢやが彼利久も予の寵臣である、爾仲が悪ふては、何かに就て不都合である、今日は是非共其方を伴ひ行き、仲直をさせにや置ぬ所存ぢやぞ、何と申ても随伴致さにや濟まさぬ。」

「斯くまでの殿命とおざれば、主と病には勝たれぬ諺、是非もなく／＼お供な仕ります」と相變らずの滑稽を吐きちらし、殿下のお供をなし、千の利久か許へと御來臨になつた何が偕て殿下の御來臨である、利久方にては心をつくして、御待遇に及

び、後世茶道の神よ、祖師とまで稱へられた、利久が意匠を凝らせし、數奇を極めし茶亭へ、御案内をした然れども、爰に訝きは、珍味御馳走を奉る可く、御招待申ながら、御菓子一片だも、食物と名のつくものは、未だ差上げない、夫も半刻や一刻ぢやない、彼れこれ二刻を過ぐれど何一つ差上げない、开して利久も最初鳥渡御挨拶に出で、御馳走準備を辭として、引退つたまゝ、更らに其後は姿を見せない、殿下と曾呂利は茶室に待ち難ね、徒然にはなる、加旂て空腹は覺えて來るので、折角名人の意匠に成る、茶室の構造も、庭園の風致さへ少も面白くも愉快でもない、たゞ癩癩が生るばかりであつ

た、殊に新左衛門は利久とは大の仲悪る、恰も犬猿垂ならざる間柄である、然れば腹立まされに、突然庭に躍出で、士足のまゝ程よく降積むた雪を蹴散らかし、散々に庭の風致を蹂躪し、狼籍を極め、庭中を荒れ廻り、遂には樹々に咲きたる、六の花をも振り落して仕舞つた

此時漸く、今日の亭主役利久宗匠出来り、新左の亂暴を見て、心中酷く怒つたが、追がに下劣なく怒鳴れも爲ないが

人ならば石の上をば行くべきに

と口吟んで、新左衛門を、四ツ足に倣へて罵つた併し敵手は曾呂利だ、

なか／＼閉口する如な男ぢやない、利久の言葉の終ると、直に少の隙もなく

ちん座敷眺め愛する御亭主は

どうせ四ツ仲間なりけり

とやりかへされ、利久は口惜く、何か今一首と考へつゝ、口をもがくさせて居る中、猶も新左は、利久攻撃の狂歌を連發をして

ちん座敷犬の友達訪ひ來り

雪を蹴立て、遊ぶなりけり

早速の頓智は、利久なその遠く曾呂利に及ぶ可きでない、と、太閤殿下は

甚く感心せられたが、利久とても可愛く思召す一人だ、何とか此機を利
用して、兩人を和解させなんと、思案最中、不圖胸に浮びし、一首の狂
歌を口ずさんだ

珍らしや犬と狎とがけんかして

猿が仲裁なかを直せよ

と、圖場抜けた殿下の、お言葉に利久も新左衛門も、互に我を折り、殿
下の御前に跪いて、爾來兩人共に、これまでの悪感情を忘れ、水魚の交
りを結ふ可く、誓ひを立てたとの事である

二十 曾呂利の願終ひの御願

從來世に傳はつた、曾呂利新左衛門と云へる奴、上臈と下臈の衝突放題
出鱈目のありたけを盡し、太閤から莫大の金品をせしめ、一體其金品を
如何處分をしたか、薩張譯分らずの野幫間野郎としか思へない、併し實
際に於ては、其様な下司張り男では決てないのだ、古き記録を獵れば、
彼新左の公益事業や、貧民賑恤の慈善に力を盡した事蹟は多々ある
或る時の事であつた、堺近邊の町人百姓共が酷く風俗が亂れたのを憂ひ
之を矯正して良民に教へ導く爲めに、一大寺院を堺の町に建立をしやう

と思ひ立つたが、太閤からの頂戴物は右から左へで、抜け裏同様、困る者には恵んで終ひ、更らに金錢の貯蓄と云ふ物はない、开處で一策を案じて、ノコノコ殿下の御前へ伺候し

「殿下に本日は、此新左衛門折入つての御願がおざりまして、參殿致しまいた、就ては願の筋、枉げて御許容を願います

殿下に於ては、少く不審に思はれたは、新左慾張らしき事を言へど、從來唯の一度も、己の口から強請つた事はない、殿下の方より何なりと望めと言へば、夫こそ耳の匂を嗅がせその、乾袋に這入るだけの米を呉れなど、途轍もない願事を言出すのだが、今日に限りて、改まつて、自己

の口から願出づるは、何かよく〜差迫つた事が出来たのであらふと、有業は苦勞人の太閤だ、早くも新左の心を察し、快よく

「珍らしや、新左汝より予に願ひ出たる事は、今回が始めである、可し何なりとも、願の筋は聞届け遣はす

「ハッ、平素に變らぬ殿下の御高恩、速の御開濟み有難がり奉ります

「シテ新左、願の筋とは何じやな
「些度大業なる望みに、おざれど、僕れが俄に思ひ立ちたる仕事におざれど、何分にも、金子拂抵の僕の手許、夫ゆへ殿下の御袖に縫り、些度ばかり頂戴仕たらうおざりませす

「左様か、大略、爾な事であらふと思ふた、可しく、何程でも汝の望みに任す、其額を言へ」

「實は僕れ思ひ立てる今回の仕事が少々大袈裟でお並びますので、何程頂戴致して宜敷か、其金額未だ相了解りませぬゆへ成べく澤山御願を致したいので……」

「少々大袈裟とは、異しいな言分殊に單に、澤山とばかりでは、瞬味にして與へ難るが、大約の其許の見込があらふ、言へ」

「左様なれば、言上仕りまするが、百疊敷の大廣間の四角形にして周圍へ一個列べに小判を置き、夫を悉皆頂戴仕りたうお並びます」

と憚る色もなく述べたには、天下の富を一身に握れる太閤殿下も、會呂利の鐵面皮には少々驚いた容子で

「小判を百疊敷廣間四角形に、列べ與へよとな……」
「ハッ、尊命の如くにお並びます」

「夫は相成らん、考へても見よ、目前に何等の功勳もなき其方に、貴重な黄金を左様に大額與へなば、他の家來共の思わくも如何と存ずる、新左何か他に望め……」

「御聞濟み相成らぬとあらば、據お並びませぬが、ウム斯ふ致しませう成程、尊命の如く小判は貴重な物、其貴重なる物を、澤山に下さる事、」

他の御家臣方に憚りありとあらば、同じ天下の通寶にても銅錢と申るや
つ非人にも乞食にも投げ與ふる錢これならば、如何程澤山此新左に賜は
るも、決して他の思惑にも差支へおざるまいかと存じます

殿下は新左の辯明を聞て成程と思つた

「甚麽さは其方の申る如く、賤き者共に投げ與へる銅錢なりせば、差支
ない、幾干なりとも望め

「ハッ然らば、百疊敷廣間一面に、お列べ下されたし、但し一層列べで
苦うおざりませぬ

と然も大額た事でもなき如に、申出た、殿下も亦た、小判一個づゝ四

角張り列べるは、巨額とこそ思へたか、銅錢の事だ、百疊敷一面と雖大
した事はあるまい、精限り二百か三百の金子ならんと、大摺みの勘定で
一も二もなく承知をしたが、其實はなかくくに、二三百の端數金じやな
かつた、却つて小判一個づゝ、四角に列べしよりは、餘程に巨額に上つ
たさうであつた

思へば會呂利の頓智は、實に豪いものではないか、始めから、銅錢と言
ずして、斯くすれば斯くなるものと、豫めの計畫を立てゝ、搦もなき様
に喋舌出して、いつも好果を握ば實に彼の得色である

儲て新左は、如斯き大金を太閤殿下の、懐中より搾り上て、一體何事に

消費するのであらふ
後世の今日に至るまで、泉州堺の南の莊に、残つて居る、浄土宗の大刹は彼れ新左衛門が、布教傳導の爲めに、大金を出して建立さしたのである

二十一 奇人終焉に臨み太閤への狂歌

瓢箪から駒の躍り出す如な、或は大蛇が吐月峰からノタクリ出るが如き奇言を吐き滑稽洒落、殆ど浮世と遠ざかつた仙か神かと、疑はるゝ行爲をするかと思へば、面の皮の千枚張、慾深の俗物爺ともなり、アツト殿

下や諸侯を愕かせ懐中を痛めつけた事も屢々だ、奇人が將た偉人か、兎に角一風毛色の異なる變り物には違ひない、曾呂利新左衛門も、未だ人間の定命には、些度ばかり早い、四十七歳の其年もはや、暮るゝに程もなき慶長二年の霜月の始めより、不圖かりそめの感冒の心持が因で、さしもの呑氣者も平素に彼が口にする如く主と病には勝れぬので、ドット枕について、頭さへ擡ぐる事の出来ない、重き病痾に罹つた
元來、世の常人とは違ふ、新左衛門の生活、斯る重患に陥れども、憐れ介り看護るべき妻もなければ、子ともなし、然れば、新左衛門、此世を去るとても、跡に残れる心懸りはないが、悲しむ人は、なかくに多

いのである

奇人會呂利新左衛門は、薄小穢なき、五六人の貧乏人に交るゝに訪ひ來らしめて、其看護を任せつゝあるのだ、太閤殿下より、數多の侍女や家僕など、御差遣はしになつても、決して彼等には、手をだもつけさせない

病床に呻吟する彼は言つた

「金品や扶持の爲めに、看護する百人の手より、誠實の意志を持つて、介抱する一人の腕に據るこそ、心安けれ

甚麽さま彼の言へるは眞理である、殿下の命に因り、會呂利の家に差遣

された、十數人の看護の男女より、心底から新左より受た、平素の高恩に報ふべく、貧乏人輩の方、遙かに勝りたる、看護の仕振は歴々見ゆる然は去りながら、天命の定まる處は、能く人力の支へべきでない、吹き來る地獄の風は防ぐべうもなく、針灸藥餌も何の効も見えず、日にく重りゆく病、はや爰今日明日ぞと思はるゝまでの、危篤に瀕した何にせよ、無二の寵臣、會呂利の事である、殿下は甚く心を惱まし、憂ひ給ひて、人を派して一々會呂利の病狀を問はせるのであるが、當今なら定めし繋ぎ放しの電話で、リン／＼の鈴の音は絶やすまいが、慶長年間だ、甚麽に太閤齋を極めても、これだけは出來ない、猶且馬脚を勞す

る早や馬の使者、櫛の齒をひく如しであるのみだ
『新左衛門今は其命危し』

との御注進を耳にせられた、太閤殿下は、侍臣を顧み給ひ

『コレよ予は今より、新左と今生の訣別を致す疾くく準備せよ』

とお供揃ひを命じて、會呂利の病宅へ、むさくるしきをも厭はせ給はず
御來臨となつた

殿下、新左衛門の枕頭に座し給へば、稍々人事不省に陥り居た、彼れ

新左も、傍人より

『殿下に在しますぞく』

の聲に激と正氣に復りて

『這は勿體もなし、殿下にて在はする乎……アラ冥加至極くく』

と皺唳れ聲で、伏し拜んで莞爾笑つた

殿下は憂色をたへし面に、新左の疲れし面影つくく眺め

『新左よ、其方如き男も、病痾には勝たれぬのう、じやが、今一度本復

して、余の傍に来れるやう、折角養生致せ

『尊命にはおざれど、本復を祈るは枯木に花を咲かせんと焦せると同じ

所詮、新左は再び殿下の御尊容拜するは、思ひも寄らず、是も是非ない
事でおじやります

「有繫は其方、能くぞ覺悟を究め居る、今生にて思ひ残せる望みあらば何なりとも、欲する處を言へ、予は譬へ如何様な事なりとも、其望みを遂げさせ得さするぞ

と最とい有難き仰せに、傍に居列ぶ諸人は曾呂利の果報を羨み、殿下の御慈愛の深きに、誰一人涙を流さぬ者はない

「重ねくの御懇命を承るもの哉、去りながら、何をか望み何をか御願ひ申さうやら、平素に思へるだけの望みは、望み盡し願ひ盡し、最早此期に臨み候ひては、何の望みとておざりませぬ、併し此新左は、近き時刻の中に、冥途黄泉とやらに旅立ちまするに就てば、何か御傳言は候はずや

はずや

「何と……冥途へ傳言なきやと申のは如何なる意か

「されば、鐵砲玉の片音信にはおざれど、僕れ、冥途に御座る殿下の御宗族の各位へ、殿下の御傳言を御取次致さうの心底……

何處まで廳氣た滑稽な男だ、意體の分らぬ新左衛門、死出の山路に、片脚かけて此駄話戯を吐くには、甚麼なる人も呆れずに、到底居られなかつた

「變つた奴ぢやのう、今將さに死なんとして、尙ほも浮世を茶にし、人を人とも思はぬ、不敵の其方、定めし地獄へ參らば、閻魔の持餘まし、

娑婆へ送り歸すであらふ

と呵々と高笑ひをされた、噫新左衛門は死するまでも忠義である、常人なりせば、死の臨際何とて陽氣になれやう、殿下の御心をして、益々悲み歎かしむるのを、逆かに悲き中に笑を催させ、幾分の憂を拂はしめんとは、總て彼の生涯は意外に充て居る

應て新左は將に、呼吸の絶々に陥入り、今にも絶命をするに臨み、其時までも、枕頭に在せし太閤殿下、御聲を勵まし

「新左、新左、何をか望め」
と再三再四の仰せに、閉ざし兩眼細目に開きし新左、糸より細き聲なれ

と

御威光で三千世界手に入らば

極樂淨土我れに賜はれ

と、奇妙變痴氣の辭世を兼ねた、強請の狂歌を残して、敢なくも、三寸息絶萬事休んだ



餘話 没後の曾呂利

智仁の巻

(土佐の光世と新左衛門)

稀代の英雄と敬虞せられ、一世を懾せしめた偉人も、青鼻くつたらし
白痴よ阿呆と衆人に蔑み拆けらるゝ小人も、三寸息絶ゆれば共に同じ土
現である。異う悟りは開いた風して、虎の皮と人の名は、死んだ後に
残ると相場を極むる似非豪傑は澤山あれど、偕て死後の名譽を後世に傳
ふるは容易な業でない、爰に曾呂利の新左衛門、生きて居る中こそ、何

の能もなき、滑稽洒落に野幫間叩き浮世にうかれし、運命の一寵兒の如
くあれ、其實は決して然らず、到底似非君子などは、遠く足元にも及ば
ない、彼新左は五常の道を正しく踏める立派な聖人君子だ、生前に於け
る彼の呑氣の一舉手一投足之れ皆仁義禮智信に、背かざる事跡の多くあ
りし、隠れたる芳芬餘話を拾遺談として録してみよう、雲烟漫筆と題す
る雑書の中に、夢廼家蘇一と呼ぶ其當時狩野派にて、頗る名人の畫工が
あつた、此畫工始めより蘇一など言ふ名ではない、又夢の家など、適は
しからぬ號をつけたのではなかつた、本姓は柴田と名乗れる茨木地方の
郷士の家に生れた、嫡々の世嗣でありながら、繪畫が好きで、初歩時か

ら師に就ては學ばなかつたが、人をして舌を捲かしむる程の、巧みに繪をかくの、寧ろ良師を撰び正則に學ばしたなら、適れ天下に名を成すの名畫工になるであらふと、その頃天下の名人士佐光持に縋りて、其門に遊ばせ、其畫號を土佐の光世と云ふ、大した名前まで、師から允されたのが、幸か不幸か身を持崩し、夫はく普大抵の放蕩ではなかつたので、終ひには師の光持にも見放され、斷然と師弟の縁を切り、破門の宣告を受けた、其日の中に現在の血肉を分けた生みの雨親からは、久離切つでの勘當となり、天にも地にも一本立の身分となつたを、決句氣樂と破門も勘當も、當人一向平氣だ、米の飯と天日様は、循環るものと懷中

に少しばかりの、金のある中は、呑氣に遊びくらす中に、限りある財囊乍ち底を拂ひ、今はなかくに米の飯どころか、麥飯さへ口にする事が出来ない憐れや餓鬼道に陥た、爰で普通の男なら、悔悟もするし、又極の氣弱き者なりせず、底の藻屑か、樹の枝の御危介と、相場は極つて居るものゝ、光世なかく爾な弱蟲ぢやない、性來の剛情と執拗れた根性骨は漸次に太くなり、徒らに世を怨み、人を憎み、所謂自暴自棄となり親戚故舊の誰彼れを押借り強請りしに、夫が巧くゆきしに味をしめ、終ひには他人にまで迷惑を掛るを屁とも思はず、惡事は漸次に増長し、果ては強奪盜賊とまで、墮落して、仕度三昧に世を送れる中、或時會呂利

新左衛門に危害を加へやうとして、反つて新左の頓智と快辨の爲めに、美事取挫がれ、此箸にも棒にもかゝらぬ破落門が不思議にも、心から真底、一念悔悟し、生れ變つた如き、善人となり、適れ天下に名を成し後世に其名筆の跡と譽れを残すに至つたは、全く新左の仁能く彼を化したのである、其頓末の大略と言へるは斯ふである、

會呂利没後の一年以前の春の初めの一夜の事であつた、新左衛門は終日殿下のお髻の塵を拂ひし、其勞れを慰めなんと、獨り瓢然御城内を立出伏見の町に遊びつひ、思はず桃山の邊りまで、ブラ／＼と何處を的となし、爪端の向く處、踵の動き次第に、徜徉をし、思はず時を過し、甚く

夜も耐け二更はとく過ぎ三更近き刻となり、ふけゆく夜風の身に泌々と寒さを覺えし新左衛門

「朧夜の春の野遊びは又格別、ツイ思はず時を過したり、我ながら鈍しイテ感冒なとひかぬ中に歸るとせん

と獨吐き御城の方へと足を向け、稍々五六丁も歩きし頃、不意に背後の方にて

「待てツ

と叫んだ者がある、新左は元より大膽不敵の男だ、恟ともしないで、足を留め、徐かに後を顧面ば、年若き上丈ある、瘦ぎすの何となく物凄き

男が、加之ドギくする自刃を携へ、此方を自眼んで、仁王立になつて居るのは、意趣斬か試斬か、偕ては盜賊か、孰れにせよ、物騒千萬の奴には違ひないと、見てとつたが新左衛門は泰然たるものだ

「待てと言はれしは、和郎か
曲者はツカくと二三歩前へ進み、白刃を目前に突きつけながら
「爾うよ

「和郎は何で呼留めたか、知らぬが、大略用の次第は知れてある、見れば、一面の識もない、和郎と僕、意趣遺恨のあらふ筈はない、和郎意趣斬に出た譯ぢやあらまい、又試斬りしさうなお人でもないげな、察する

に奸盜ぢやろう、金銀財寶望みなりや、何程でも持つて行けるだけ遣はさうに、じやが財寶望みない、此命望みとありや、強つて渡さいでもおざらぬが、今は少々此方に要用ぢや、些度渡難いで、拒絶もする、何とぢや、返答聞かう

と例の快辯は縦板に水か、油紙に火のつくとも言ふのであらふ
道がの曲者も聊か煙に倦かれた容子で

「能く喋舌る奴、自體和郎何者ぢや

「夜盜に名前調べ受けるは、始めていぢやが、問はれて名乗らぬ譯にもなるまい、僕は、浮世の變物、曾呂利新左衛門と申するものぢや、シテ

和郎名前は

「ウム儲ては、當時世の中に名の高い、太閤殿下の御寵愛を蒙る、アノ曾呂利新左衛門殿かな」

「甚麼にも其如り、夫に違ひないが、シテ和郎は」

「夜盜が名を乗つて、追剝ぎも出来まいに」

「真に夫も爾ぢや、可しく、持物は元より、身ぐるみ脱で、折角の和郎の望みぢや、和郎に眼つけられたは、何かの縁ぢや、悉皆渡さふよ」と言ひながら、帯を解き着衣を脱ぎ、真裸體となり、一纏にして曲者の前に突き出した

曲者は對手が意外の人物で、爲る事が意外で、开して先刻よりの快辯に何とも知れず怖氣を覺えて來たので、聲さへ顛を帯び

「モ、持物で、充分でおざるよ、キ、着衣まで脱ぐには及ばぬに」

「存外慾の薄い、夜盜殿じやよ、要らぬとありや此方の幸ひ、春の夜寒に、裸體の夜途はにやならぬかと思ふたに、まづ、夫だけは脱れ申たソラ懐中の金子は、生憎徜徉に出掛けたまでじやに、澤山あらふ筈はない、僅た十金餘り尠ふて氣の毒ぢやの……時につかぬ事承るが、夜盜殿は、一年何程稼がらるな」

「一年何程と言はたれとて、夫ほど長い月日盜賊やらぬで知れぬワイ」

『ならば新味ぢやの』

『新味ぢやと言ふて、なか／＼に悪黨でおどるよ』

『自身、我身を悪黨と言はれるからは、悪いと言ふ事辨へてぢやに、爾』

言はれるのや、改心の楷梯まで足掛けられて居られる、僕は和郎眞の悪

黨とは認はせぬ、シタガ從來人殺した事あるか

『人こそ殺さぬ、ジャガ悪黨ぢや』

『自分で自分を悪黨がる人、得て誠の悪人は尠い、和郎改心せぬか、次』

第に因りや、新左衛門、力添へしやうに』

と夫より辯を振ひ、彼曲者を説く事約小半刻、終ひに彼をして、悔心せ

しむるに至つた

此曲者とは郷士柴田の伴、土佐光世である、新左衛門見る處ありてか、

此夜は所持の金子を強ひて渡して袂を分ち、翌る日わざ／＼、光世の寓

居を訪れ、赤心籠めて親切に世話をしたので、光世も曾呂利の仁心に感

じ、素行が滅切り變つたので、世話効ありと、曾呂利は力を盡して、光

世を引立てゝやつたので、技術は益々進み、漸く從來の悪行を世人に忘

れられる様になる、従つて當人も勵みが出る、曾呂利の死後數年慶長の

中頃に至りては、京師に於ける畫界の屈指の名家とまでなつたのは、曾

呂利の頓智と仁心の賜である

禮義の卷

(大覺和尚と會呂利)

會呂利新左衛門は單に一風流變つた野村問的の人物でない事は、讀者諸彦に大抵は知られたであらふが、未だ斯な隠れたる芳ばしき、遺話がある、命けて禮、義の卷と云ふ

泉州堺南の莊目口町に總禪院と云へる一刹がある、此寺院こそ、長の年月、新左衛門が起伏をしたのである

此寺の住職は大覺和尚と呼ぶなかく、氣輕な坊主、少々腥氣の脱ない方で、磐若湯(酒の) や御所車(玉子) 天蓋(鮪の) 等は、葦酒山門に入るを

許さずと、記してある寺門を、毎日潜つて居る位はまだしもであつたが果ては白粉臭ひ匂が夜なく、芥と寺中にする事がある様になつた、併し斯如な事は、現今の世の中なら、些少も珍らしい事もなければ、怪い譯でもなく、又誰に憚る處も恐れる廉もないが、其當時は僧侶の肉食女犯は言ふまでもなく、國法の嚴禁で、开して頗る峻酷な、處罰があつたのである、それが爲め之を犯する坊主は、出來得るだけ秘密に其露現を防いで居るものゝ、兎角に隠し事は知れ易いもので、一年の中には京畿地方の僧侶のみで、十數人は嚴罰され、傘一本で寺を追拂はれる、墮落坊主はあつた

此總禪院の大覺和尚も以前乳森の里に、遊女をして居た妖婦を毎夜竊かに寺内へ呼び入れ、巫山戯散らせる、曲事の顛末が、堺の町奉行杉江作右衛門の耳に這入つたので、這は棄て置き難しと、早速部下に命じ、内偵の結果、退引ならぬ確證を獲たので、最早容赦はない、大覺和尚は總禪院の寺門を憐れや繩つきとなつて潜つた。
大覺和尚が役所へ拉し去られし上は、所詮重き罪科は免れる事は出来な

然れば、大覺和尚も猶且同じ運命、誰一人として憐む者もない中に、唯一人、非常に大覺和尚を救ふべく、努力紛骨した者が現はれた、是を太閤殿下の腰巾幗、會呂利新左衛門である。
何故に新左衛門が大覺和尚の爲めに、力を盡すか其理由は、新左衛門が殿下の知過を辱ふせぬ以前、和尚に多少の米鹽の世話に與かりし、其恩義に酬ひんが爲めであらふ。
新左衛門は感冒の氣味で、頭重く甚麽にも苦惱であるので、お暇を乞ひ自が居室に引籠つて、藥湯の手當てなぞして居る處へ何か用事ありて堺へ使に出せし召使の者歸り來り、其用向の口上を述べ終りて後

「今日御使ひの爲め、堺へ参りしお影にて面白き珍らしき事、目に致しまいた

「夫は何より、シテ面白き珍らしの事とは、自體何ぢやの、咄してみよ
「女犯の坊主奴が、繩附で慘酷の姿で役所へ引きたてられる處を、目前に見まいた

「ヤレ〜氣の毒千萬、國法ぢやに、致方もおぎないが、坊主とて生身
「ぢやもの偶には女犯もしやように……自體何處の坊主か

「左様、人の噂にや、堺南の莊、總禪院の大覺和尚ぢやとの事におぢります

何事にも動せぬ、新左衛門であるから、別段に際だてる、愕き様や周章
てた舉動は少だにないが、徐かに頭を枕より放し、蒲團の上へ、挫と躓
踞し

「其の事、眞誠か
と念を押せば、召使者は

「坊主の面見知りませねば、總禪院の大覺和尚とは、人に其名を聞くば
かり、果てとまで保證出來ませぬ

「夫も尤も道理〜、ぢやが、和郎、其坊主の面、確と見まいたか
「夫は面のみは、確に見覺え居ります

「然らば問ふが、其和尚身丈高い六尺近い大きやかな入道ぢやおざらぬか

「能うぞ知られておざる事よ、仰せの如しで

「シテ肉色は赭面にて、口大きく

「其の如しく

「眼も亦大きく、鼻のみ甚く低やかにて

「仰の如くに、其儘く

「眉毛太やかに、耳の傍り、確か左とこそ、覺ゆるが、大さ銅錢程の紫斑がある

「少しも夫と違ひはおざりませぬ

「然らば正しう、大覺和尚に違はぬ、コリヤ、打捨置けぬ

「御主人様には、其和尚御存じであらせらるか

「甚麼にも、有縁の僧ぢや、衣服持てツ

「併し御主人には御病氣中、何處へお立越なさるのでおざります

「何處とは知れた杉江の役宅病押しても行かねばならぬ……

「ぢやと仰せあつても、萬一、御病氣に觸りまいては、一大事、御見合せありまいては

「聽かねば兎に角、和尚の危難、安閑とは見棄ては出来ぬ、病に觸らば

時節ぢやよ致方ない

「然らば、何としても、御立出でなりまするか

「行かねばならぬ、早う仕度せい

「左様なれば、誰ぞ御使者を遣はしては、如何でおざります

「此事なかくに、使者なぞでは、所詮瑠明かぬ哩、如何あつても、自身出向かにやならぬ

新左衛門は、家僕が心を痛め、強ひて外出を諫めしも道理である非常に熱昂ぶり、氣分殊の外に悪しかりしも、病を壓して杉江作左衛門の役宅指して立出でし、其時の會呂利の眼中には、大覺和尚の身あるを、知り

て自己の身あるを忘れたのである

義の爲めには、一命さへ惜まぬ新左衛門である、精神の興奮の爲め、病苦も打忘れ、身仕度整へ、杉江作左衛門役宅を訪れ、作左衛門に面會を求めた

堺の界限に於てこそ、飛ぶ禽は落すのは些度難いが、泣兒位は屹度黙らせる、バリ／＼の勢力はある、町奉行杉江作左衛門、余人に對ひては、素晴らしく權式を張つて、直々の面會なぞは、容易に仕ないのであるが新左衛門の訪ありと、取次の申出でに

「御鄭寧に粗末なき様、書院へ御案内致せ

と命じた、作左の心中言ふまでもない、身分は兎に角當時、殿下の無二寵臣新左衛門

彼に怨みを受ければ甚麼なる犬糞的の復讐を受くるも知れずと、諸候ですから一目置いた位の人物だ、用向の如何はまだ知らねど、俄の訪問は孰れ尋常ぢやあるまいと、譯分らずと、何となく安からぬ思ひで、新左に對面をした

重くるしき作左の挨拶、新左の輕口の應答は開始せられ

「コレハ、珍らしや會呂利氏、平素御健勝に涉らせ、何より祝着、偕て今日は能うこそ御來訪下され、此作左身にとり本懐に存じておじや

「イヤハヤ御丁寧なる御挨拶を受け、恐れ入るより外おぎない、實は御來訪致した用向は、些度お耻かしき次第、新左平素の原皮にも似ず、面から火の出る如な、お咄で………枉げて杉江殿のお袖に縋らねばならぬテ………

「這は會呂利氏とした事が、斯く云ふ作左如き者の袖に縋るなぞとは、異なお咄し、お戯れ御無用に願たい

「否や、戯れや滑稽の次第でおざらぬよ、實真以て、新左、身にとり、一大事の次第是非共御身ならでは、叶はぬ用向きでおじやるよ

「ハテ儲て益々不思議、合點まいらぬと申すは、外でもおじやらぬ、餘人なりや知らず、足下様願の事ありや此作左如きに頼ますとも直々殿下に御願出ありや、何事も心の儘になるべきに殊更めきし、足下の御言葉合點ゆかぬも、無理ではおじやるまい

「甚麽さま爾仰せられると、猶更ら新左、赤面仕るが、實は殿下に御願申上ても是ばかりは殿下様すら、御自由御勝手にはまるらぬ事で、足下様より外此廣い日本に唯だ一人よりおざらぬ、夫ゆへ御足下に枉げてお願致すのでおじやるよ

腹に一物も二物もある新左衛門、其用向きを露出前に慫んなに、長々と

冒頭を並べたつるは、相手の作左衛門の氣性が小膽者ではあるが、存外の剛情で开して執拗僻があつて、非常な自尊心の自惚根性のある爲め、時に拜み倒しを喰ふ事あるまで、彼の長短兩所を悉皆新左衛門は呑み込んで居るので、故意と重々しく、そろ／＼拜み倒しに取掛つた、とは知らぬ作左衛門、事の重大らしきには何とも知れず心配だが「殿下すらはぬ事、足下より外廣い日本に唯一人」と言はれたのが、作左の心中、頗る愉快を感じたとみへ、乘氣になつたは其顔の色にも知らるゝ

「殿下様さへ叶はぬ事、何條此作左如きに、御相談あるとて迎も詮なふは心得おじやれど、膝とも談合とやら、兎にもあれ御用の趣き承りた

うおじやるよ

新左の心中占たり、稍々其圖に倣まつたと、喜悅に満されては居るが、故意と一層悄然かへり、さも面目なげに

「實に慙うでお耻しや、女子の事でおじやるよ

「何とな……女子の事

と鷓鴣返しに、吐く如くに言ふて如何なる事を言出すかと、肩胛張詰めし作左は拍子抜けして、新左の顔を見詰めた

「左様、女子の事から、飛んだ他人に迷惑相掛け申た、夫ゆへ足下の御力添へを願ふので

「何事が重大なる次第と心得りや、額が女子の出入、足下に不似合千萬然程御心痛もあるまいに、シテ他人への迷惑とは如何なる譯か存せねど其位の事なりや大抵は知れて居る、折角の足下の御依頼、何事でも引受け申した、御安心あれ

「夫れ承りて新左、蘇生つた心持致した、千萬忝けない

「御禮では痛み入る、シテ其次第柄

「然らばお咄し致す、實は僕れ一人の女子竊かに平素寵愛致し居りまいたが、殿下を始め御近臣の方々にまで、女嫌ひの新左と知れ渡り又自己も女嫌ひと口癖に言ひ居る手前、何とかして一生知らさぬ様と、僕れ忸

懇の和尚に頼み其寺へ預けたが、一生の失策、氣の毒にも其和尚僕より預かりし女子の事から、女犯の疑受け、當御役所へ御召捕り相成りたる趣き、何卒右様の次第ゆへ、御嫌疑晴らされ、即刻此新左衛門に、其和尚御引渡し願たい

「容易の事でおざらぬ、シテ其女犯の和尚とは若しや南の莊、總禪院の大覺和尚の事でおざるか

「甚麼にもく、其大覺和尚でおじやるよ

「折角のお頼み、殊には餘人ならぬ足下のお言葉添へでおじやれど、是ばかりは平にく、此儘に願たい

「ハ、开は又た如何なる理由にて左様の仰せあるか、承りたし

「大覺和尚は既に、具に其罪狀を白狀し、口書爪印まで相濟み申た、天下の罪人でおじやれば

「夫が大な間違ひで、大覺和尚は一旦僕より女子を預けし事を口止めを頼みしゆへ譬ひを守りて、自分が恐ろしき、女犯の罪に墮てまでも、口を開かなかつたのでおざるよ

「誠に御氣の毒ながら、此義ばかりは、此儘にく

「何とお願い致しても御承知おじやららぬか

「此儀ばかりは

「然らば御問ね致す、苟も武士たる者、況てや奉行の職にある、足下は能うも此新左衛門を欺きめされたナ

と少く眼の色を變へたは、作左の小膽の短所へ斬り込み、諾かずば、犬糞的の復讐は、殿下に絶るぞと言ぬばかりの權幕、果して作左は怖氣だち

「御立腹では恐れ入る、さう然れど決して足下を欺き申た、覺へ毛頭おさらぬ

「夫れく、それが、欺いて居るではおざらぬか、たゞの今足下、何と御意めされた、何事でも引受け申た、御安心あれと、確に此新左は耳に

残り申す、舌の根乾かぬに御言葉、御變替、些度合點まらぬ次第柄、ヲ、了解た輕々しふ御聞濟みありては、興が薄いとのお悪い洒落からのお言葉、何で寛仁大度の作左衛門殿、何で二枚の舌を真から遣はれやう新左の過言は、平に御容赦く

作左衛門は遂ひに言葉尻を押へつけられ、グウの音も出ない益々鋭く附け入る、新左衛門の雄辯に、終々煙に捲かれ

「何とか致すでおざらふと濫々ながらに、大覺和尚引渡の事を承知した

今日の時代とは違ひ、人民の生殺與奪の權は奉行の掌裡にあるのだ、开

處で一旦罪科の確定した、總禪院大覺和尚は、罪なき者として放免の恩命に浴したは、實に會呂利の義心の恵みである

會呂利新左衛門は大覺和尚の一命を助け、再び總禪院の住職とせしめたが、決して其後と雖、少も恩に被せない、其以前、總禪院の一寓にありし昔の夫の如く、大覺和尚に對する禮節は、少も變らない

俠信の卷 (木村隼人と會呂利)

能く喋舌り殿下のお膝下に、膠の如くに侍れど決して其實は多辯饒舌の阿諛野郎ではない彼が口にする諧謔戲言の中に、自ら光りありて、人を

益せし事は屢々であつたが、嘗て害ひ惱めしを聞た事がないのみならずだ、磊々疎放の素行の如くして頗る禮讓あり、仁義あり、緩々として物に迫まらず悠長に見へて、其動作の機敏にして頓智に富める、誠に稀有の代物であつた本傳にも記してあるが、殿下に仕へ知遇を受しは文祿より慶長二年まで僅に數年の短日月間だ、彼の活躍時代は頗る短いと云ふより寧ろ充分に、彼の手腕を振ふの機會がなかつた爲めに、是ぞと云へる程の事蹟を青史に残し得なかつたは、誠に彼の爲めに惜むべき次第である

一時恁ふ云ふ事があつた、殿下の侍臣木村隼人から折入つての頼みを引

受け、死するまで彼の秘密を永久に葬つてやつた、芳ばしい語りが後世の今日雲煙漫筆に因て傳へられた木村隼人は木村長門守一門の家に生れた武士であるが、才智も武勇も人後に落ちて、學問も淺く開して性來大の粗忽者と云ふ、長所のない男だ、併し家筋の良い所から、召し出され殿下の御膝近くに奉公するの身分となつたが、性來は致方がない、屢々失敗のみして、殿下のお覺へも誠に良しくないので、當人もわく／＼して勤めをして居た

和蘭渡りと稱へられ殊の外殿下が大切に御秘藏なされしギヤマン(硝子器類)の水吞器があつた、現今なら恐らく廿錢銀貨一枚にも、價へせぬ程の

ツプであつたらふが、其當時にあつては、太閤殿下ですら、無二の珍寶として、粗忽なき様堅く臣下に吩咐けた程だ

恚る貴重の珍寶を、如何なる機會が粗忽にも破壊した、木村隼人暫の程は破はれし碎片を凝視めしまゝ、殆ど正氣を失ひ、死人の如く、木偶の如くであつたが、應て我に顧り、四邊を見廻せば、幸ひ何人も傍に居なかつたので、生格臆病で卑屈な小人であるから、乍ちムラ／＼と、不正の念が胸に浮んだ

見る人なきこそ幸なり、破片を悉皆取片づけ一纏となし、何處へか打棄て終へば、何者か、盗み出した事になつて、自己の罪は知れなくなるで

あらふと、淺猿しくも又た、卑しい料簡を生し、周章て散亂せるギヤマ
ンの破片碎片を、拾ひ集め一纏めに紙に包んで急ぎ足に其場を立去つた
隼人は破片を何處へ棄んと、城内の其處よ彼處と、探し廻り、漸く程よ
き處を、見つけた

爰は飲り人の通らぬ、御庭の一隅である、隼人は左右を見廻せど、人の
來れる氣配がないので

「棄て場所は爰を除ては他におざるまい、ドレ〜人の見ぬまに……
と獨り呟き、件の破片の一纏めを、地上に投げ出し、一二間ばかり、駈
出したが、何事をか思ひ出したか、急に立留り、再び破片を棄てたる位

置へと立戻つて、破片を拾ひ上げ

「單恁う爰へ捨て置たばかりじゃ、安心が出来ぬ、地の下深く埋めて終
へば到底も知れる譯はあろまい、爾じやと、獨り問ひ獨り答へて、傍に
落散りし木の枝拾ふて、地盤を掘り始めた

折しも爰へ、通り懸りしは、例の會呂利新左衛門であつた、隼人が松の
木影に半身隠し、頻りに地盤を掘つて居るので、不審を生し、密と其傍
に進み寄り、唐突に聲を掛けた

「其處に居られるは、隼人殿には在はさずや
と言ふ聲は百雷の落下せし如くに、隼人の耳には鳴響き、思はず跳り上

つた

「何をなされて居られし、隼人殿

と重ねて言葉を掛けられ、隼人は

「何卒御見逃し下されたい、平に」

「イヤ、何かが何やら、斯く云ふ新左更らに了解申さぬ、見逃せとは、

自體何事でおざるよ

「夫では先刻よりの事、御存じなくて在せしか………實は大した事では

おざらぬに………

と白ばくれかゝるに對手は會呂利だ、隼人如きに何條で胡麻化されやう

會呂利の心中では、殊更ら何も隼人の秘密を暴きたて、恚うしやうの斯

うしやうの云ふ考へは、微塵もないが、對手が隠すので、之を言はしめ

たくなつたので、揶揄半分に

「大事でなけりや、殿下に申上ても、苦うおざるまいか

と眞向から御面と一本打込まれ、隼人は周章狼狽つゝ、顛えあがつた

「メ、滅想な、殿下に言上は平に御容赦く、斯の通り」

と掌を合せて頼み入る可笑さを耐へ、故意と澁面つくり

「相成り申さぬよ、然し和郎が事を譯けこれく云々の次第と、萬事明

らさまに相談ありや、又格別………、それを何ぞや、此新左衛門を盲目

扱あつかひにして、秘ひし隠かくしにせやうとめさる、和おの郎し、惡にくう思おもふも、無む理りでお
じやるまい……喃のう隼はい人と殿どの、何なんと爾そではあるまいか

と剛つよく柔よはく巧たくみに説と伏ふせられ、隼は人とは充じ分ぶん新しん左さ衛ゑ門もんに看み破やぶられたものと
早はや合が點てんをして居をるのである、夫それゆへに七な重へ八へ重へに膝ひざ折なり曲まげて、新しん左さの
袖そでに縫すがり、秘ひ密みつにして貫もはねば、輕かろくて切せつ腹ぶく、重おもけりや斬きり首くびは免まれぬ、
命いのちの瀬せ戸と際ぎは、一せう生けん懸けん命めいの場ば合あひである

隼は人とは武ぶ士しに似に氣ななく、大だい地ちに土ど下げ座ざをして兩わう手てを突つかへ、米こめ搗つき蝗はうの夫そ
の如ごとく、ペこく、ピヨコく頭かしらを低ひげ、額ひたひに泥どろを塗まらし

「何なに事ことをも御ご承せう知ちの御ご身み様さまに對たいし、包つみ隠かくさうと致いたせし段だん、重ちゆう々く不ふ都と合が

萬ばん申まを譯しわけもこれなし、平ひらに御ご勘かん辨べん倫りんしも御ご容よう赦じやこれなき時ときは、拙せつ者しやの命いのちは
亡なくなる次し第だい何なに卒そ御ご救きう助じゆ下くだされし

と兩れう眼がんよりは、急きふ霰せんの如ごとくに涙なみだを流ながしての頼たのみに其その實じつ、事ことの仔し細さいは知しら
ないのだが、事じ態たいの輕かろからざるは推す察さつが出で來き得うるので、新しん左さも稍や々ま真ま面まへ
目めになり

「土ど下げ座ざまでめされての、僕やつがれを見み懸かけての御ご頼たのみ新しん左さ、身みに代かへ包つみ申まを
さう

「這こは有あ難がたき御ご思し召めし、子し々ん孫そん々くに至いたるまで此この御ご恩おんは忘はう却きやく致いたさせませぬ
「シタガ隼は人と殿どの、自じ體たい何なに事ことを仕し出で來かしめされた、實じつを申まをせば新しん左さ衛ゑ門もん、

和郎が如何な曲事仕出來いたか、存せぬのでおじやるが、和郎の事ゆへ天下の不利益な事や、又殿下に對し害心挾む大反た曲事でもおさるまい何とか良き分別、お貸し申さうよ、悉細お話しめされ

「儲ては猶且、御存じなかりしか、然し今更ら隠したて致すは、御身様御思召にも背き、猶々罪を重ねる次第、さらば包まず申上る……」

と例の珍寶、和蘭渡りのギヤマンの水吞器を毀損たる一伍一什を物語り其發覺を恐れ、地底に其碎片を埋藏せんとする處を認められたる、顛末を明かした

腕拱きて隼人の自白に、新左衛門は黙して耳傾けて居たりしが、道の

新左衛門も太閤殿下の無二の珍寶であるから、如何にせば無事に解決を結ぶであらふか、良き思案は頓には胸に浮ばない

「フム……夫は困つたの、成程容易な事ではおざらぬよ

「何卒其處のところを、余人に知らさぬ様に、堅く御他言御無用に願上奉る

「何とか分別せざアなるまい、たゞ此事秘し隠しにばかりは濟むまいにハテ儲て良き思案も、烏渡浮ばぬ……殆と困する事を、出來しておさるの

新左衛門は、隼人に對ひ、浮かくと

「身に代へて包み申す」

と苟にも齒から外へ出した、言葉を反古にすることの出来ぬ氣性の男である、然し隼人は小人である、巳の心に忖度し、新左衛門が前言を取消し、他人に吹聴したり又は殿下に言上を爲る様な事ありてはと、顔色土の如く齒の根も合はずブルブル、惣身を顫はし

「會呂利氏、何卒く御救け御見逃を願たい、平に御間濟み下されたし隼人殿ッ……………」

「ハッハハ……………」

「和郎は、此新左衛門を、何と見らるゝッ

「何と見らるゝと、御意あるは……………」

「御了解ないか、了解らにや解いて語らふ、僕はただ今の今、何と口外致いた、身に代へ包み申すと、和郎の耳に、這入らざりしか、這入りしこそ禮も述べたであらふに

「では、此事此儘、秘密の裡に成し下さる思召しとな我が命の親は御身様でおさる、有難しく」

「然し其碎片、土中に埋むる事は相成り申さぬよ

「然らば、何れへ放棄てるのでおじやる

「何れへ棄てるには及び申さぬ、其儘……………新左に御渡しめされ

「エッ、御身様に……」

と再び不安と驚愕の色を浮べ、恐怖猜疑の念は溢れ、ガタ／＼と惣身を顛はす隼人を新左衛門は、不惑に思ひ

「然な心痛めさるな、新左男子でおじやるよ、和郎身分に關る如き事、

決して／＼仕出來し申さぬ、和郎余りに心痛めさるゆへ、其ギヤマンの

碎片僕にお渡しめされと申せし仔細、念のう語つて聞かさう、其碎片持

出し殿下に訴へ和郎罪に落さうなぞ、其様な卑しの根性、微塵おざらぬ

此新左實を申せば、僕が此罪を一身に引受けて進せる覺悟でおぢやるよ

俠氣溢れし情けの言葉に隼人は恰ら夢中に潑とばかりに、地上に平伏し

「面目おざらぬ、今こそ御身様の信あり義あり情けある、お言葉を

承り先非悔悟を致し申た、思へば耻じや、身不肖ながら、筋目正しき

武門の家に生れながら命惜さに己と罪を犯しながら、卑怯な振舞致すに

反さかへ、たゞ一言を重んじ他人の罪をまで身に引受けんとまで、思ほ

さる、御身様誠に以て、赤面仕る、最早拙者覺悟仕つて、おざる是より

直に潔よく罪の顛末を殿下に謝し、御處刑を蒙りまする

と、言ひ終つてはふり落つる涙を袖に拭つて、決心の色を面に現はした

噫人の心機一轉ほ速かなるはなし、女子にも劣つた、臆病卑劣の木村

隼人も曾呂利の信と俠には、全く別人の如くに、化せられた

會呂利新左衛門は、隼人の男らしく正し心に變りしを喜び、殿下の御袖に縫りて、隼人の罪を謝したので、殿下も新左の赤心に絆され、隼人の罪を放した美譚がある

其後一年余を過ぎ新左衛門は没したのであるが、隼人は七十二才の高齡を保ち世は代り、徳川の御世となりし、元和の八年、彼の死する其時まで、會呂利の墓前に、月に二三回は必ず参拜をした

會呂利頓智笑談終

明治四十四年七月廿五日印刷
明治四十四年八月一日發行

定價金三十錢
郵税金四錢

著者 狂花園

發行者 湯淺 策

印刷者 菅井 十郎

不許複製

發行所

東京市日本橋區若松町四番地
電話、電報四八六二番
振替口座一八〇六番

湯淺春江堂

庫文トツケホ

美文大觀

小林篤里著

定價金三十錢

模範日記文

大平野虹著

定價金三十錢

美的候文

翠楊散人著

定價金三十錢

無敵劍舞術極意

斬馬秋水著

定價金三十錢

新書翰

翠楊子著

定價金三十錢

朗吟詩集

山岡鵬齋著

定價金三十錢

唐詩選講義前編

大畑匡山著

定價金三十錢

新歌集

花の屋主主人著

定價金二十錢

唐詩選講義後編

大畑匡山著

定價金三十錢

藤八けんの打振り

小西可東著

定價金二十錢

アラビヤ物語

蕨生譯著

定價金三十錢

長唄集

杵屋露友選

定價金二十錢

庫文トツケホ

ホケツト文庫

村田天巖著
家庭講話ニコくお伽ばなし

定價金二十五錢

園部紫矯著

坊ちゃん新お伽噺
嬢ちゃん

定價金二十五錢

園部紫矯著

家庭講話武士道お伽噺

定價金二十五錢

園部紫矯著
家庭講話お伽夜話

定價金二十五錢

流行歌曲

ボケツト藝者

定價金二十五錢

新派舊劇

聲色十八番

定價金二十錢

